

37高次脳機能障害者への社会的支援(3) -医療福祉相談室における支援についてその1(事例報告)-

医療相談開発部 森曜子 菅原美杉 上村裕子 藤井英恵 中島綾子 嶋田未希 佐久間肇

1. はじめに

当センター病院では高次脳機能障害外来で診断・評価し、入通院でリハビリテーションを行い、同時に社会復帰に向けて高次脳機能障害者への社会的支援を行っている。(平成16年度入院患者80名 外来患者56名 医療福祉相談室調べ) 社会復帰後も、福祉制度、利用可能なサービスや施設の提供等、本人、家族、関係機関からの相談があり継続して支援を行うケースが多くみられる。本発表では医療福祉相談室で継続的に復職や復学、在宅復帰等、典型的な高次脳機能障害者への社会的支援の事例を報告し、支援上の配慮点について整理、考察する。

2. 事例概要

事例1(復職): 50代男性。交通事故。(記憶障害・注意障害・遂行機能障害)自動車任意保険。労災利用。精神障害者保健福祉手帳所持。入院・外来訓練後、障害者職業総合センターの復職プログラムを利用。地域の障害者職業センターのカウンセラーが復職に際し介入し、配置転換をした上で職場復帰。

事例2(復学): 20代男性。交通事故(記憶障害・注意障害)自動車事故任意保険。入院訓練終了後、大学へ復学。復学後も週1回外来訓練を継続。

事例3(在宅復帰): 40代男性。スキー事故。(記憶障害)身体障害者手帳所持。遠方に転居が決定し、当院外来訓練終了。2ヵ月後に新生活が軌道に乗らず、家族関係も問題が生じたと連絡あり。

3. 支援上の配慮点(MSWの対応)

事例1(復職): 障害者職業センターの情報提供と利用に至るまでの調整。労災制度、精神保健福祉手帳、障害年金等、各種制度の情報提供。復職後の状況確認。家族支援。

事例2(復学): 復学の手続きを確認(学校側の窓口、休学期間、取得単位数、通学経路と手段、ボランティア活用等)復学後は、学校生活や今後の就職について支援継続。

事例3(在宅復帰): 外来終了後からの経過確認。高次脳外来の再受診案内。再受診後にキーパソンの変更を促し、改めて地域で利用可能なサービスや精神障害者保健福祉手帳等の制度を説明。継続的に家族支援を行うこととなる。

4. まとめ

事例1、2は入院時から現在に至るまで継続的支援を行っており、転機における高次脳機能障害者である本人や家族の不安、悩みに適宜対応している。事例3は支援が途切れてしまったケースであり、家族から相談があり支援再開したが、連絡がなかった場合は対応不可能であったと考えられる。このように退院や外来終了によって支援が断絶してしまうのではなく、問題が生じた際に随時対応可能な当室独自の支援の流れを確立することが重要である。

高次脳機能障害者への支援は個別性が高く、現状では対象者によって利用可能な制度も異なることや地域格差があることから、最新の情報を収集し、相談機関やコーディネーター等へ引継ぎ、調整していくことが必要である。当院の場合、地域ネットワークはもとより日本全国の広域に渡り高次脳機能障害についての相談を受けているため、MSWとしての支援方法のスキルアップを目指していきたい。